

連絡二ユリズ

日本海区水産試験研究

発行所
新潟市万代島

印 刷 所

る。好漁場は津軽半島一帯に形成されこの為青森県は初漁も早く漁獲も一〇〇万貫を軽く突破する豊漁に恵まれたが、男鹿半島以南は不漁特に新潟、山形の漁況は不振であつた。

雅仔の出現関係をのぞいては海況をはじめとして、ブランクトン、北半球の気象状況などは昭和三十年に極似している事を附記しておくる。

放射能調査の報告及 計画打合会

日本海北部海域の大羽イワシ漁況予報

卷之二

日本海北部海域では昭和二十五年より関係水試と日本水研が協同して主として環境方面からみた大羽イワシの漁況予報が行なわれ注目すべき成果をあげている。その内容は地域間の相対的漁況に重点をおき能登以北および辰羽群という二条件を基本に海況

方三〇浬より佐渡沖合を通り鷲崎北方二〇浬附近より右におれて栗生島海域に流入しているものと、沖合よりN三九度四〇分の緯度線に沿つて男鹿半島のやや南側海域に流入北上しているものとが認められる。又能登半島、佐渡間にも弱い流れがあり佐渡海峡に指向している。この年の好漁場は新潟北部から山形南部海域と秋田南部海域に

た。これに反し新潟、山形の
ふたる有様で新潟は不漁であ
分以下、山形はわずかに一〇
の水揚げにすぎなかつた。
このように北部日本海の春
羽イワシの漁場は暖流主流路
形成される事はきわめて判然
これを要約すると暖流主流路
山形沖合で海岸線に平行に走

両県はさんたる前年の半万貫そこそこの接岸海域における大期においてはなかつた。また三十三年度は予算が半減されたので東海、西海及び日本海の三水研のみが担当し、且つ調査の目標も海洋生物が主体となつた。

(日水研)

昭和二十九年より三十一年までの最近四年のものについてかんたんにのべてみると、昭和二十九年は暖流の主流はN三十九度線に沿つて沖合より海岸線にほぼ直角に粟生島海域一帯に流入しているものと、能登半島をまわつて佐渡海峡に入る二派が認められ、そのうち粟生島海域に流入している

主流路は一転して海岸線とほぼ平行に走り、その流軸は能登、佐渡、男鹿半島沖をかなり減少している。なお秋田県は南部漁場だけで九〇万貫（好漁）近い漁獲をあげた。

主流路が南偏し新潟、山形沖合で海岸線に好漁場が形成されるという事になる。このようなわけで北部日本海の大羽イワシ漁場はいつにかかつて暖流主流路の接岸状況にあり、といつても過言ではない。勿論主流路が沖合冷水のはりだしと相対的な関係にある事はいうまでもない。

以上のような点を主眼にしてこれに、プラントン、卵稚仔、各魚種の漁況、気象などの状況が加味されて総合的な環境方面からみた漁況予報が行なわれるわけである。

主なる項目 —第86号—

- 環境からみたイワシ漁況（日本海）
 - 放射能調査打合会
 - 漁況海況予報会議
 - 資源会議
 - 山陰プロツク会議
 - いわし予報会議
 - サンマ研究討論会
 - 漁 採
 - 研究室だより
 - 日本海プロツク会議

三月十三・十四の両日、東京で水産庁主催の下に初題の会議が開かれた。この予報調査は過去五カ年にわたる「対馬暖流開発調査」の終了と共に、三十三年度から日本海側で開始されるものであり、暖流調査同様國庫補助である。

海洋構造研究の重点は、九州から北海道に至る共通の調査研究の重点としては、暖流側の予報調査の重点は、九州から北洋構造研究のための基礎資料の集積と決定した。しかし各水研の対象魚種は多少異り、次のようにある。

一、日水研管内一大羽イワシ、

但し三十三年度からは、スルメイカ、サバ等の漁況予報の可能性を検討していく。また

地域的には今後、能登以南の日本海南部にも日水研として積極的に参画していく。

二、北水研管内ーサバ、アジ、

スルメイカの予報に重点を置いていく。

三、西水研管内ーサバ、アジ、

イワシに予報の重点を置く。

右予報調査の実施要綱は、来る二七・二八の両日の日本海

プロック会議で各水試と論議し、その決論を研究第一課に送付するが、研一では、各水研の分を統一型式として印刷配布することとなつていて。

なおこの事業の一環として、日水研では九月一日～一〇月一五日の間、昨年竣工した新鋭調査船俊鷹丸（一八四トン）を使用し、日本海沿岸開拓附近の漁場調査等を行なつた。（開拓部三月二十二日記）

漁況海況予報調査会議開かる

沿岸重要資源と底魚 担当官会議

年刊行してきたイワシ協同研究報告の今後の処置についても同委員会で討議の上決定されることとなつた。

島根県

昨年に比して〇・五度水温高く、隱岐海峡で一二・五度～二度で一番高い、沿岸暖流は隱岐海峡から赤崎に向つて、接岸した。

去る三月十二日、十三の両日、東海区水研会議室で標記の会議が開催された。その時の経過の概要是次の通りであつた。

第一日（十二日）

底魚資源調査の昭和三十二年度経過報告並びに三十三年度事業計画の討議

第二日（十三日）

沿岸重要資源の昭和三十三年度事業計画の討議

(1) 沿岸重要資源の昭和三十三年度事業計画の討議

(2) 沿岸重要資源並びに底魚調査研究に対する府県委託費の海区別配分

このうち、沿岸資源分のみ決定し、底魚関係分は四月中に開催される所長会議の節討議の上決定されることとなつた。

(3) 昭和三十年度イワシ協同研究報告の取纏めは北水研担当で第二次原案の提出があつたが、充分検討するだけの時間の余裕がなかつたので、各水研別は文書による質疑応答を重ね、四月中旬に一応検討を終り印刷に付することとなつた。

第八回漁況予報山陰 ブロツク協議会

第八回漁況予報の山陰ブロツク協議会は去る三月二十五・六の両日に涉り、鳥取水試が当番となつて、同県境港市において開催された。

この協議会には、当番県を始め兵庫県、島根県及び福岡県の各水試担当者が出席し又日水研からは香住支所の渡辺徹抜官が出席した。

各県の発表した大羽いわしの漁況は次の通りである。

福岡県
(4) 今後における沿岸重要資源の研究課題と実施方法

これについては前回分科会を開いて論議されたが、南海区水研横田技官が立案した方法論について討議した結果近く企画常任委員会（仮称）といふものも開催され、その委員会の決定要項を所長会議に提示して了承を得ることになつた。なお、昭和二十六年以来毎

六羽いわしの東遊適温期となり、なお現在までの漁況は、三月一六日に沿沖で流網統が操業し、約二〇メートルの漁獲があつたがその後は目立つものはない。

なおこの漁獲は昨年に較べて約二週間遅れている。

鳥取県

六羽いわしの東遊適温期となり、なお現在までの漁況は、三月一六日に沿沖で流網統が操業し、約二〇メートルの漁獲があつたがその後は目立つものはない。

なおこの漁獲は昨年に較べて約二週間遅れている。

鳥取県

利用研究懇談会

日本水産学会の年次大会に引続いて四月五・六日の両日、東海区水研で、利用研究懇談会が研究課の主催で開催された。

例年の利用担当官会議にかかるものであるが、本年は各水研から申込のあつた一六の研究についての発表が行われこれに対し討議が活潑に行われた。第二日目の午後は各水研利用部の研究テーマの取扱方、方向等についての論議が行われたが結論は得られなかつた。

（日水研）

島根県
漁獲は低調、魚群の反応は浜田NW二〇四〇浬付近にあつて接岸する模様はな

第二回

サンマ研究討論会

表題の討論会は三月七・八日塩釜市東北海区水産研究所で開かれた。私は三年ぶりにこの会に出席したので、その概要について報告する。

まづ三歳調査結果にもとづく漁況・海況・魚体組成等について一八篇の報告質疑が行われた。要約すると北海道太平洋側は約一千万貫余で不漁であったが、本州東北側は約九千萬貫で豊漁であった。漁獲物の体長組成は双峯型(三四・二九年)と同型、他の年は单峯型(三四・二九年)であった。初漁期北海道東南側における親潮勢力の南下が強かつたことが北海道不漁の原因であり、盛漁期金華山沖の黒潮前線が強勢で、三陸沿岸にや直交する東西方向に存在し、サンマ群を停滯させたのが本州側好漁及び魚体双峯形の原因である。等々となる。

次いで、サンマの生化学・漁況・海況関係(予報を含む)系統群・産卵・成長及び資源量等について一六篇の研究報告が行われた。これらのうち最も興味深かつたのはサマの成長について從来の説が、木村所長他東北水研のスタッフにより覆えられたことであつた。從来漁獲物の体長組成に現わ

れる三峰(うち最小の峯は不明瞭)は、それぞれ二、三、四年群に相当するとされたが、これは幼魚の飼育試験及び自然測定法によつてそれぞれ一、一・五、二年群であることが明らかにされた。すなわち漁獲物の中の中型群と大型群は從来異つた年令群とされていたが、そうではなくて発生シーズンを異にした群とされたわけである。私はこの会で対馬暖流水域のサンマの産卵は、

されどいたが、そうではなくて発生シーズンを異にした群とされたわけである。私はこの会で対馬暖流水域のサンマの産卵は、

望潮魚とは、どんな魚ですか。

話はチヨット古くなるが、先般こんな電話問合せを、三日間位にわたつて、十数回受けた事がある。

きく人は、県庁の役人あり、町の人あり

探

後になつてフト気がついて試みに手持ちの俳かい歳時記を、繙いてやつと見つけた。
「春の部」に飯蛸すなわち、望潮魚なりと……。畢竟、魚にして魚にあらずと言う處か。

説明に曰く、蛸の一種にして体小さく

凡五、六寸、春腹中に飯の如き肉満つ、

煮て喰えば、その肉蒸したる飯の如し、

多し云々とある。しかしこれも季節によることである。

句

飯蛸の飯今通り喉仏仙臥
飯蛸の腸もなく食われけり戊子
飯蛸に足あるこそおかしけれ東洋城

北半分では單一のシーザン、南半分では明瞭に分離した二つのシーザンにそれぞれ行

われるなどを報告したが、これもまた成長

線が沿岸と直交する東西方向に形成される

年は大型群の南下も停滞し、双峯となる

とする見解である。

最後に三十三年度の研究打合があつて、二

1 漁期は例年に比して一般に

昭和三十三年日本海況予報

北日本海における漁場の主な場所は、

能登・佐渡・栗島(佐渡海峡を含む)附近である。

尙、五月に入ると漁場は山形及び秋田

海域に移り、入道崎以北は大きな期待が

もてない。

3 北日本海域は全般的にみて昭和三〇年

に似た豊漁型である。

漁獲物は二年魚が比較的多い。

漁獲は低落、魚群の反応に乏しくこと、四〇瀬付近にあつて伏遊する現象はない

漁獲は低落、魚群の反応に乏しくこと、四〇瀬付近にあつて伏遊する現象はない

石川県以北を対象とする春大羽いわし漁況予報会議は、秋田県水産試験場において

例年通り三月三〇日に、石川・富山・新潟・山形・秋田・青森の各県水試場長と相当

技師および日本水研係官が出席して開催され

た。

(日本水研)

